

シリーズ 中学校武道

授業の充実に向けて 80

中学校武道授業の現状と課題、その対策 相撲

公益財団法人日本相撲連盟
中学校体育授業指導法研究委員会 座長

桑森 真介

平成24年度から中学校保健体育授業において武道が必修化され、3年が過ぎようとしている。

平成20年に告示された学習指導要領において、相撲は柔道、剣道に並記され、重要な武道種目の一つとして取り扱われている。しかしながら、公益財団法人日本武道館による平成24年度の調査（文献①）では、中学校の保健体育授業での相撲の実施率は3%をいくらか超える程度であり、柔道や剣道に比べて明らかに低いというのが現状である。

公益財団法人日本相撲連盟では、中学校体育授業指導法研究委員会（以降、「指導法研究委員会」と略す）を設置し、『中学校体育 相撲指導の手引き』（以降、『手引き』と略す）、『中学校体育 相撲指導の手引き——安全管理・指導について——』（以

降、『安全管理・指導について』と略す）および『中学生相撲実技入門』（以降、DVDと略す）を作成するとともに、教育の場における相撲の普及を図るために、種々の活動を行ってきた。

本稿では、指導法研究委員会の目標・計画（P: Plan）および活動（D: Do）について振り返るとともに、同委員会の活動の点検、教育現場の現状の把握、課題の整理（C: Check）を行い、それらに基づく対策（A: Action）の私案を示す。

目標・計画（P）

指導法研究委員会では、相撲の実施率を10%に近づけることを到達目標とした。少しでも多くの子どもたちに、相撲の授業を通して、勝敗を競い合う楽しさや相手に全力でぶつかり力を出し切ったときの爽快感・充実感を味わい、さらには身体が接触した体勢で互いに全力を出し合うことで、相手に対するシンパシーや尊重する気

持ちが生まれてくることを体感してほしいと考えた。

上記の目標を達成するために、以下の計画を立てた。

- ① 中学校保健体育で相撲を指導する際、以下の指導書『手引き』および付属動画教材を作成。
- ② 作成した『手引き』その他の教材を、教育現場の先生方に知っていただくための広報活動を展開。
- ③ 講習会・研修会を開催。講師を派遣。
- ④ 地域ブロックごとに、相撲教育

グラウンド、柔道場などを利用してできるという施設面での特性

・裸でまわしを締めなくても、体育着の上から簡易まわし、相撲パンツ、柔道の帯などを装着してできるという用具面での特性
・ルールが簡明で安全性が高いことから、初歩的段階であっても生徒が審判をして簡易的な試合を楽しむことができる遊戯性を、教材としての相撲の魅力として挙げた。

(2) 広報活動

指導法研究委員会では、『手引き』、DVDおよび『安全管理・指導について』を無料配布するとともに、日本相撲連盟ホームページ

http://www.nihonsumo-renmei.jp/tebiki/index.html

で、すべて閲覧・印刷、視聴することができるようになった。

また、これらの教材の内容を紹介するためのリーフレット（図1）を作成した。リーフレット

の普及員として、指導者講習会・研修会の講師および外部講師等の協力者を配置。

活動（D）

(1) 『手引き』ほか教材の作成

日本相撲連盟では、平成22年に指導法研究委員会を立ち上げ、平成23年には同委員会の下で『手引き』およびDVDを発行した。

平成24年度から中学校1・2年の体育で武道が必修化された。

指導法研究委員会では、平成25年に、『手引き』とDVDを改訂するとともに、『手引き』の付属冊子として『安全管理・指導について』を発行した。

これらの作成に当たっては、①どこでも、誰でも、安全に、授業ができる、②生徒が楽しさや喜びを味わうことができる、③学習指導要領に準拠する、の3点を基本方針とした。また、『手引き』では、土俵がなくても体育館フロア、

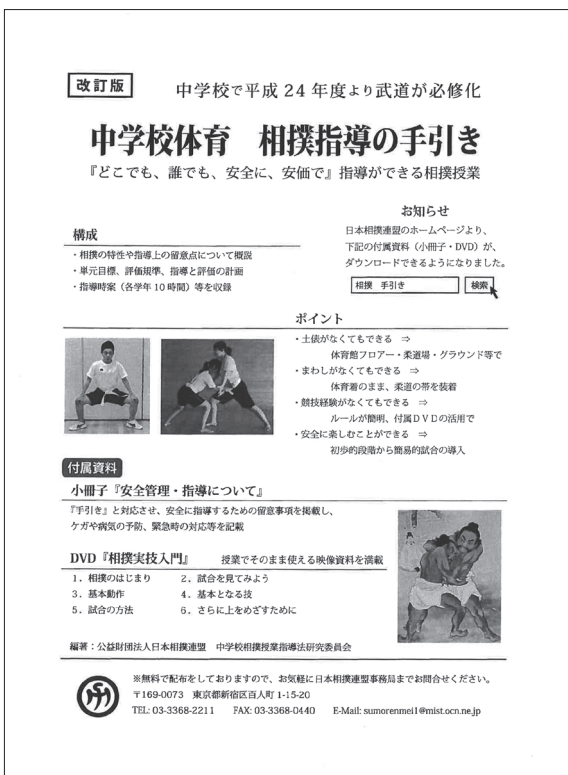


図1 リーフレット

質問:「授業で相撲を取り入れているか」

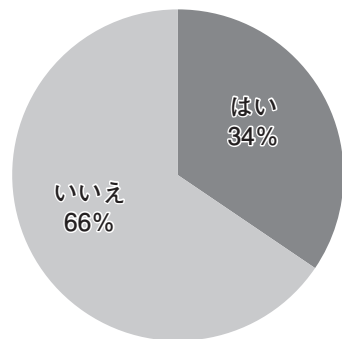


図2 授業への導入

質問:「相撲の競技経験があるか」

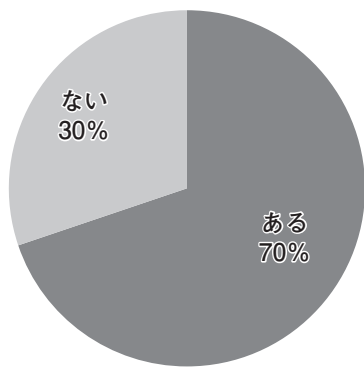


図3 競技経験の有無

る、あるいは取り入れる予定があると回答したのは34%（10名）であった。

本研修会は、中学校武道必修化に対応した内容になっており、中学校体育授業で相撲を取り入れている、あるいはその予定があるという教職員等の教育関係者の参加を期待した。しかし、教職員の人数は29名と少なく、全体の参加者は、本研修会計画当初に目標とした80名に及ばず、結果として55名に留まった。さらに、相撲を授業で取り入れている（または予定がある）と回答したのは10名（34%）しかいなかった。これらのことは、中学校体育授業での相撲の実施率が低く、教育関係者の間で相撲の教材としての魅力が十分に認知されていないことを反映しているものと推察できる。

図3に示すように、相撲の競技経験がないと回答した割合は30%（16名）であり、その他は競技経験者であった。指導経験があると答えた77%のうち、授業で指導経験があるというのは13%（8名）に留まり、部活動および地域のク



中学校相撲授業指導法研究委員会
左から、桑森真介座長（筆者）、満留久摩先生、安藤均先生、松浦麻乃先生。その他、安井和男先生、堀内弥先生、村田安啓先生、事務局・吉村登さん



第1回全国相撲指導者研修会 講師は満留久摩先生

国民体育大会相撲競技会や全国中学校相撲選手権大会等の監督者会議に出向いて配布し、中学校の保健体育科における武道の必修化について説明し、関係者に理解と協力を仰いだ。

(3) 講習会・研修会の開催および講師派遣

日本相撲連盟は、例年2月に文部科学省との共催で「学校相撲実技指導者講習会」を開催している。また、平成26年9月には日本

武道館との共催で「第1回全国相撲指導者研修会」を開催した。これらの講習会・研修会では、指導法研究委員会（委員が中心となり、講義・実技を行った）。

その他、各都道府県での武道必修化対応の相撲指導者講習会・研修会において、講師派遣依頼があった場合には、指導法研究委員会委員が出向き、講義・実技を実施した。これまでは、高知県、福岡県、徳島県、島根県、三重県などから要請があり、講師を派遣した。

3 指導法研究委員会の活動の点検および教育現場の現状、課題(C)

(1) 実施率

公益財団法人日本武道館は、平成23年度および平成24年度に、各都道府県および政令指定都市の教育委員会に対して行ったアンケート調査結果を公表している（文献①）。武道必修化が実施された平成24年度では、全中学校の中での相撲の実施率は、武道9種目のうち、柔道、剣道に次いで3番目であった。しかしながら、その実施率は3・4%というように、柔道の60%超、剣道の30%超に比べ、明らかに低い値であった。

指導法研究委員会では、実施率をここ数年の間に10%に近づけることを到達目標としているが、現状のままで達成が困難といえる。実施率を大幅に上昇させるための具体的な方策について詳細に検討し、これまでの活動実績を基にしつつも、さらに積極的に取り組む必要がある。

(2) 目標達成のための計画

四つの計画について、5段階で評価した。以下にその結果を示す。

- ① 指導書『手引き』および付属動画教材を作成
- ② 広報活動の展開
- ③ 講習会・研修会の開催と講師の派遣
- ④ ある程度実行できた
- ⑤ 十分に実行できた

2…あまり実行できなかった
上記のように、計画の①～③については、十分といえないまでも、満足し得る活動ができたといえる。しかし、実施率の現状を見ると、女子用DVDを作成できるか、各都道府県教育委員会に相撲の魅力をいかにしてアピールするか、各都道府県で講習会・研究会や研究授業等の開催をどのようにして増やすか、などの課題について前向きに検討し、実施率上昇に向けた積極的な方策を講じる必要

を修得させる。
・発展段階の試合で、「巻き返し」などの前さばきを活用し、生徒の関心・意欲を高める。
担当の先生は、課題として、発展段階でどのように授業を展開すれば、立ち合いから当たり合う相撲を安全に楽しく行うことができるかを工夫していくことを挙げている。

③神奈川県鎌倉女学院中学校（特別講師…松浦麻乃先生）
鎌倉女学院中学校では、平成23年度から、指導法研究会の委員の一人である松浦麻乃先生が外部指導員として出向き、集中形式（2日間）の授業を行っている。
生徒は相撲について、授業前は、「体の大きい男性のスポーツ」「痛そう・難しそう・やりたくない」という印象を持っていたが、授業を受けた後は、「女子でも楽しくできる」「大きくなくても勝てる」「勝負の後、達成感や爽快感がある」というように変わったということである。

また、当該中学校の担当でない先生からは、初めは相撲と聞いて



鎌倉女学院中学校での相撲の授業
体育館フロアで運動靴を履いて、しこの練習

驚いたが実際に授業を見てイメージが変わった、生徒がとても楽しそう、相撲は女性らしいスポーツだと感じた、などの意見があり、さらには、担当の先生から、相撲は身体感覚・接触やコミュニケーションをとる上でも優れている、相撲をやった良かった、といった意見があったということである。
課題としては、外部講師は直接評価をしないが、評価の要点等に

現状の点検と課題を踏まえ、次に筆者の考える対策を示す。今後、指導法研究会で、これらを参考として、具体的な活動について検討していけたらと考える。

①実施率が低い都道府県の現状を把握した上で、教育関係者との意見交換の場を積極的に設け、各地域・都道府県での講習会・研修会や研究授業の開催数増加に向けて、積極的に働きかける。

②都道府県相撲連盟と連絡を取りつつ、地域ブロックごとに協力者を配置し、協力者を通して、相撲授業に関する情報収集および相撲授業の実施や講習会・研修会等の開催に向けた積極的な働きかけを行う。

4 対策（A）

③これまでの活動を基礎として、『手引き』等の教材や講習会・研修会等の質向上を図る。

④講習会・研修会等の参加者確保のためのより積極的な具体的対策を講じる。

【参考文献】
①三藤芳生…中学校武道必修化アンケート調査結果について、『武道』、2014年3月号、156～163頁、2014年。
②公益財団法人日本相撲連盟・中学校相撲授業指導法研究会（担当…松浦麻乃）…第1回全国相撲指導者研修会受講者アンケート集計、第1回全国相撲指導者研修会《国庫補助事業》報告書、78～80頁、2014年。
③上村裕一…長野県福島中学校での相撲授業実践例、第1回全国相撲指導者研修会《国庫補助事業》報告書、59～63頁、2014年。
④入倉裕司、廣瀬理奈…山梨県忍野中学校での相撲授業実践例、第1回全国相撲指導者研修会《国庫補助事業》報告書、64～67頁、2014年。

ラブでの指導経験があるという割合は75%に上った。
『手引き』では、「だれでも授業ができる」（競技経験がなくても指導ができる）としているが、参加者の中で競技経験がないのは3割程度であり、経験のない人が相撲の指導に対して敷居が高いと感じていることがうかがえる。
自由記述で挙げられた相撲授業の課題の中では、女子生徒の抵抗感を取り除く方策や女子用DVDの作成、あるいは特別支援学校での指導法の確立などが特筆される。

(4) 授業実践例

ここでは、第1回全国相撲指導者研修会での上村裕一先生（文献③）および入倉裕司先生・廣瀬理奈先生（文献④）の実践例報告、指導法研究会での松浦麻乃先生（委員）の外部講師としての実践例報告（未公表資料）を基にして、教育現場の現状と課題について述べる。

①長野県木曾町立福島中学校（担当…上村裕一先生）

担当の先生は、相撲は誰もが手軽にできる運動であるにもかかわらず、学校体育で取り上げられることは少なく、その理由として、相撲を専門とする保健体育教諭が極めて少なく、中学・高校・大学で相撲の授業がなかったことが考えられると述べている。今後の課題として、相撲が専門でない教員でも指導ができそうと感じる授業を展開し、研究授業等でそれを広く紹介することの必要性を挙げている。



福島中学校での相撲の授業 マット土俵で女子の試合



忍野中学校での相撲の授業 グラウンドで押しの練習

また、「転んだり、ぶつかったりして痛い」「裸でまわしを締めることが恥ずかしい」「体格の大きい者が有利」などの生徒が嫌がることを極力排除する工夫が必要であり、相撲の中核的な技能を外さない範囲で、従来の競技相撲の概念を崩していくことが大切と述べている。

②山梨県忍野村立忍野中学校（担当…入倉裕司先生・廣瀬理奈先生）
安全に楽しく行う相撲の授業を

目指し、段階に応じた工夫を行っている。担当の先生は、試行錯誤し、常に授業内容を改善していくという積極的な姿勢で取り組んでいる。
該当中学校では、以下のような工夫を試みている。
・初期段階で、相撲ゲーム等の遊びの中で転がる練習をして、受け身を修得させる。
・発展段階で、受ける側に回り込むことを指導し、押す側には相手の動きに応じながら押すこと